

水辺に親しむ

江東区深川江戸資料館

河川や掘割り、江戸湾に囲まれて発展してきた江東区の歴史は、産業・流通面はもちろんのこと、人々の精神的な部分にも、水辺が深い関わりを持ち、独特の文化や慣習を生み出してきました。

江戸時代、現江東区周辺の河川を往来する船は物資の輸送用だけではなく、瑞々しい情緒豊かな、人々の心をいやしてくれる水辺の景勝地を求めて、多くの行楽客が訪れました。

1 水辺に楽しむ人々

隅田川の周辺は、その地理的な近さから江戸市民が日帰りで楽しむ場所が多く、名店や名物が生み出されて、一層のにぎわいを見せました。

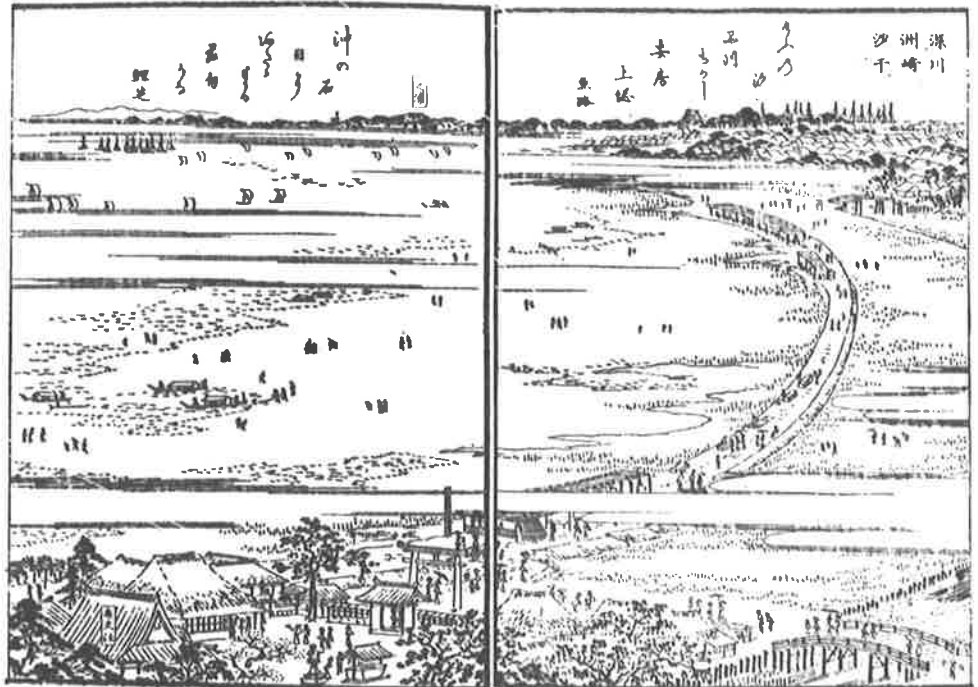
隅田川東岸にあたる江東区域では、富岡八幡宮・永代寺門前や潮干狩り有名な洲崎の海岸、桜並木で有名な砂村の富岡八幡宮（元八幡）などがあげられます。

また大名の別邸としての下屋敷や商人の別荘も多く、水辺を背景に風光明媚な眺めを楽しみました。

【永代寺門前】

現在の深川不動堂から深川公園付近にあった、富岡八幡宮を管理する別当・永代寺では、江戸時代の年中行事として、山開きが毎年3月21日から4月15日まで行われていました。

『江戸名所花暦』（文政10年）によると、この庭園



洲崎『東都歳事記』

では牡丹が有名で花盛りのころには、日覆障子ひおおいをかけ渡すようすが見事だったと伝えています。

このあたりは眼前に江戸湾が広がり、寺社の大きな建物とともに独特の景色が見られ、高級料亭や水茶屋、屋台などが、数多く営業していました。

【洲崎の海】

富岡八幡宮の南東にあたる洲崎は、江戸湾に面した海浜にありました。眺望のよさから、江戸市民が初日の出、潮干狩り、月見といった観光遊覧の場所として、大いに賑わいました。突端に弁天社があり、門前には料亭、大小の茶屋がならび、特に升屋という料亭は庭に数寄屋造りの蹴鞠場けまり、小亭などがあって諸藩の留守居役や豪商の接待に利用されました。

また深川一帯の大名屋敷には、低湿地という条件を生かして、潮の干満を利用した「潮入り庭園」が造られるようになりました。

【行楽地への道しるべ 一道標一】

行楽地が成立するにつれて、道案内としての道標

が建てられるようになりました。江東区内では現在まで、13基の道標が確認されています。

四つ目通りの小名木川に架かる小名木川橋北詰にある道標は、大島にあった五百羅漢と亀戸天神への道を示しています。

また亀戸の常光寺にある六阿弥陀道道標は、この常光寺までの道程を示すもので、元は北十間川に沿って建てられました。このように、江東区を訪れるときは、水運が多く使われたことが、道標の位置からもわかります。

2 河川にまつわる話

川・沼・海などにまつわる言い伝えは実にさまざま、カッパが人馬を水中に引き入れようとする話や、池・沼の主（大蛇）の話、また、海坊主や船幽霊、浦島伝説などが一般的によく知られています。

これらの話の根底には、水の神・霊や水死者の霊に関する信仰があると考えられます。江東区でもカッパの話など川・堀・池・湿地などを舞台とした話が伝承されており、こうした話の世界にも水辺という土地柄が背景にあることがわかります。

では区内およびその周辺地域の事例の中から選んでご紹介しましょう。

【おいてけ堀】

まだまだ掘割りにも鯉・鮒・ドジョウがたくさん泳いでいたころのお話。

釣り人がとある堀で、時間のたつのも忘れて釣りに興じ、びくいっばいの魚をかついで帰途につきました。あたりはすっかり暗くなっていて、人気もなく、なんとなくさびしいなと思ったその時、どこからともなく「置いてけ～、置いてけ～」という声がかげこえます。釣り人が恐ろしさのあまり、びくを置くと、今度は「持ってけ～、持ってけ～」と声がかげこえてきます。

これを二度三度と繰り返すうちに、釣り人が正気に戻ると、びくのなかはからになっていました。

〈話の背景〉「おいてけ堀」伝説は本所七不思議の

ひとつで、墨田区両国付近から東部に残されています。

昔は本所や亀戸には田畑が多く、池や堀のまわりには夜になると、さびしい場所がたくさんあったため、こうした話も生まれたのでしょうか。

【片葉の葦】

昔、留蔵というならず者がおり、お駒という美しい娘に想いを寄せていました。お駒には他に好きな人がいて、ならず者は大嫌いでしたので、何かと言い寄る留蔵を無視していました。

そんなお駒に腹を立てた留蔵は、ある日葦の生い茂る堀端を歩いていたお駒に切り付けて殺してしまいました。

その後、その堀の葦は片側にしか葉のない、片葉の葦になってしまい、そこを片葉堀と呼ぶようになりました。

〈話の背景〉本所七不思議のひとつで、隅田川からの入り堀が今の両国一丁目にあり、これが片葉堀といわれましたが、両国橋の掛け替え時に埋め立てられてしまいました。葦は水辺に自生するイネ科の植物で、江東区・墨田区地域には湿地帯が多かったため、葦で覆われた場所もみられたようです。

【カッパ】

昔、江戸のあちこちにカッパが棲んでいたといえます。隅田川沿岸や墨東地域の水辺は、カッパの天下。仙台堀カッパ（江東区）と源兵衛堀カッパ（江戸川区）の喧嘩を錦糸堀カッパ（墨田区）が仲裁した話などがあります。

〈話の背景〉カッパ伝説は、川や堀が生活用水、農業用水、運河や子供の遊び場などとして、人々の暮らしに今よりも身近だったことがその背景にあると考えられます。

カッパは川・池・海に住むといわれる妖怪ですが、本来は水の霊として信仰されています。現在の源森川の枕橋付近や錦糸公園のあたり（墨田区）にも、カッパの話が伝わっています。